

一般社団法人 日本学校教育相談学会

The Japanese Association of School Counseling and Guidance

会報 JASCG

- 1◎能登半島地震に際し//巻頭言
- 2◎巻頭言//第36回研究大会(愛知大会)のご案内
- 3◎第34回中央研修会の報告
- 4◎支部のキラリ
- 5◎一支部活動報告—【新潟県支部】
- 6◎スクールカウンセラー情報
- 7◎研修委員会//認定委員会
- 8◎学会誌作成委員会//広報委員会//ガイダンスカウンセラー
関連情報
- 9◎会員の著書紹介
- 10◎会長コーナー//事務局より//編集後記

第73号

能登半島地震に際し

会長 春日井 敏之

この度の能登半島地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、ご遺族の皆様には心よりお悔み申し上げます。厳しい寒さの中での避難生活で大変なご苦労の日々かと思いますが、被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

日本学校教育相談学会では、東日本大震災における取り組みなども踏まえて、「全国災害対策委員会」を設置し、災害発生時には会長副会長会、役員会の議を経て、「災害被災者支援委員会」を立ち上げて取り組むことを定めています。この度の能登半島地震に対しましても、近畿・石川ブロック、南関東・新潟ブロック、及び石川県支部、新潟県支部とも連携を図りながら、短期・中期・長期的にどのような支援が可能なのか早急に検討し、学会としての支援活動を進めます。

なお、これまでの災害被災者支援活動で活用されてきた関連資料などにつきましては、学会ホームページの「大災害時における中長期的な支援の在り方」をご参照ください。

2024(令和6)年1月

巻頭言 私と教育相談

研修委員会委員長を仰せつかった文教大学(埼玉県支部)の会沢信彦と申します。

本学会に入会したのは、森川澄男先生とのご縁で、平成13(2001)年だったと記憶しています。その後、やはり森川先生のご推薦により、平成17(2005)年より研修委員会でお世話になっています。平成24(2012)年度から令和5(2023)年度までは副委員長も務めさせていただきました。

研修委員としてはそれなりに長く務めてまいりましたが、学会員としては、幽霊会員に近かったことをここに告白せざるを得ません。実は、夏季ワーク



研修委員長
会沢 信彦

ショップ以外の総会・研究大会に参加したことは数えるほどしかないのです。また、支部活動についても、まったくと言ってよいほど関与していませんでした。

と言うのも、本学会に対して、「小・中・高などの学校現場の教職員が中心の学会である」という、実に勝手な思い込みを抱いていたからです。私は、いわゆる現場の経験は、1年間の高校非常勤講師と、2年ほどのスクールカウンセラー経験しかありません。

しかし、大役(研修委員長、埼玉県支部副理事長)を仰せつかった以上、心を入れ替え、総会・研究大会に参加するとともに、支部活動にも積極的に関与することをここに誓います。そのように誓うもう1つの理由は、役員会への出席を通して、春日井会長をはじめとする執行部の先生方の「学会の在り方を見直し、変えていきたい」という、並々ならぬ決意をひしひしと感じたからです。

役員としては新入りながら、既に学会の在り方について気づいたことを申し上げる機会が何度かあり、しっかりと受け止めていただいている木村事務局長には感謝の思いしかありません。これからも、学会の発展のために微力ながら貢献するとともに、気づいたことはまた提案させていただきます。

学会員の皆さまには、ご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしく願いたします。



★第36回研究大会(愛知大会) のご案内

令和6年8月、「学校教育相談はどこへいくのかーアフターコロナと生徒指導提要改訂ー」のテーマで、第36回総会・研究大会(愛知大会)を開催します。この会報とともに「2次案内」がお手元に届いているかと存じます。

主管支部としてみなさんのご参加をこころよりお待ちしております。

【日 程】令和6年8月3日(土)・4日(日)

【場 所】刈谷市総合文化センター

- ・名古屋駅からJR快速で約20分
- ・刈谷駅から直通通路あり

【テーマ】「学校教育相談はどこへいくのかーアフターコロナと生徒指導提要改訂ー」

- 【内 容】
- ・文部科学省講演
 - ・大会記念講演
中谷素之先生(名古屋大学)
 - ・学会賞記念講演
 - ・研究発表(口頭・ポスター)
 - ・自主シンポジウム など

※研究発表、自主シンポジウムはすでに申込みを開始しています。詳しくは本部のホームページをご覧ください。

愛知大会は、令和元年の宮城大会以来、久しぶりに対面形式で開催します。直接顔を見て、ふれあい、話し合うことの大切さや意義深さは、本学会の会員のみなさまにはご理解頂けるとおもいます。

現在、愛知支部は会員が最も多い支部となっています。今後の大会がどのような形式で開催されるかは分かりませんが、どんなケースにも対応できるよう、途絶えてしまいかねない対面開催のノウハウをここで取り戻しておければと思っています。大げさではありますが「愛知がやらねば誰かやる」という使命感と気概をもって取り組みたいと思います。

一方で「人数の多い支部だから大会を開催できる」ということではなく、教員の働き方改革などが進む中、省けるところは省き、大切にすべきところは大切にしながら、持続可能な大会運営を目指しています。これまでの大会と比べ、簡素な印象をもた

れるかもしれません。この点においては、おいて頂いたみなさんに率直な感想を伺いたいと思っています。手弁当で集まった会員の努力で積み上げてきた本学会ではありますが、できるだけ支部と会員の負担の少ない運営をしていきたいと思っています。

もちろん、内容面では充実した大会を計画しています。現在、愛知支部では、少しずつ準備を進めているところです。大会記念講演講師には、地元名古屋大学の教育発達科学研究科教授、中谷素之先生をお招きします。中谷先生は、教育心理学・学習心理学・発達心理学・パーソナリティ心理学などのお立場から、学習や対人場面における動機づけ(やる気)などについて研究をされています。名古屋市の教育委員として教育現場にも精通した方です。愛知大会のテーマにご賛同いただき、ご多忙にもかかわらず快く講演を引き受けてくださいました。われわれもとても楽しみにしているご講演です。また、恒例の文部科学省講演も対面で行われます。こちらは春日井会長をはじめ本部役員のみなさんがお骨折りくださいました。

この他にも、まだ詳細は申し上げられませんが、自主シンポジウムなど興味深い企画を予定しています。どうか愛知まで足を運んでくださいますよう、お願いいたします。

(文責：愛知大会実行委員長 松原 正明)



★第34回中央研修会報告

第34回中央研修会を1月21日(日)にZoomによるオンラインで開催いたしました。

今回の中央研修会は、午前にはコース別講座、午後はパネルディスカッション、そしてオンライン交流会という流れで実施いたしました。

参加者数は、183名でした。

それぞれのプログラムについて、参加者数と簡単な感想を報告させていただきます。

【コース別講座】(9:30~12:30)

<Aコース>

発達に偏りのある子どもの不登校支援

講師：田中康雄氏(こころとそだちのクリニック むすびめ院長)

参加者数：53名

児童精神科医としての豊富な現場経験をもとに、不登校の子どもに教育現場は医療と共にどう寄り添うか、皆さんで考えました。

<Bコース>

認知行動療法による不登校支援

講師：神村栄一氏(新潟大学教授)

参加者数：76名

不登校の背景に触れつつ、認知行動療法について、参加者の疑問に丁寧なご回答をいただきながら学びました。

<Cコース>

スクールソーシャルワークの立場からの不登校支援

講師：安永千里氏(横浜国立大学附属学校スクールソーシャルワーカー)

参加者数：17名

SSWの役割やミクロ・メソ・マクロにわたる視点についてなど、具体的な事例を通して理論と実際を学ぶことができました。

<Dコース>

不登校経験者が考える不登校支援のポイント

講師：村山大樹氏(帝京平成大学専任講師)

参加者数：28名

不登校経験者だからこそわかる不登校児の心理状況や、社会的自立に向けた支援のあり方について、深く学ぶことができました。

【パネルディスカッション】(13:30~16:30)
＜テーマ＞いま、改めて不登校支援を考える
＜パネリスト＞

- ・宮古紀宏氏（国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター総括研究官）
……『生徒指導提要』と不登校支援
- ・山本志織氏（さいたま市教育委員会指導2課 主席指導主事兼生徒指導対策係長）
……行政による不登校支援
- ・中林浩子氏（下関市立大学教授）
……学校現場での不登校支援
- ・鎌倉賢哉氏（特定非営利活動法人越谷らるご理事長）
……フリースクールによる不登校支援

＜コーディネーター＞

- ・会沢信彦（文教大学教授）

参加者数：148名

パネリストからはそれぞれのお立場での不登校に関するご意見が語られました。また、チャットで多くの質問や感想が出されました。

【オンライン交流会】(17:00~18:00)

参加者数：29名

3、4人の部屋に分かれ、じっくりと語り合うことができました。

運営に当たっていただいた、(株)平文社に記して感謝申し上げます。

(文責：研修委員長 会沢 信彦)



☆支部のキラリ!☆

「特別支援教育コーディネーター」の役割を通して見えてきたこと

北九州市支部 原 貴美江



学校教育相談学会に入会し3年目です。通常の学級担任、特別支援学級担任、特別支援学校担任を経て現在は通級担当として小学校に勤務しています。

会報 JASCG69 号によると、「教育相談コーディネーターが他の役割ほど十分に位置づけられていない、役割が見えにくい、どこまで機能しているかが不透明といった意見が多く見られているという現状があります。その背景として管理職や行政の理解や認識、教職員の理解や価値観、校内における教育相談や位置づけ、特別支援教育コーディネーターとの差異、外部に任せようという意識等、様々な課題がある」と書かれていました。

現在、通級担当として巡回指導に当たる一方で、本務校の校長より特別支援教育コーディネーターの指名を受けて校内の児童についての支援を行っています。保護者からの依頼や担任からの依頼を受けて相談ののるとともに、必要に応じケース会議を行っています。ケース会議を開くにあたって過去の経験が今の基盤となっています。以前勤務していた小学校では、学期ごとに全学級を対象にケース会議を行っていました。参加する教員は校長、教頭、教務、学年主任、担任、養護教諭、特別支援学級担任、特別支援コーディネーターでした。課題のある子どもについての見取りをホワイトボードに挙げていきます。まず、担任が行った手立てについて上手くいった点と上手くいかなかった点を出します。それぞれの立場から意見を出し合い、次の学期に向けて改善策を話し合います。子どものよさや得意な分野を生かせるような支援を協議しました。担任一人で対応するのではなく、チームで対応していくというところは何よりも心強かったです。

私がケース会議で大切にしていることは、

- ① アセスメントをする（実態把握にとどまらず、指導や支援に生かす）。
- ② 課題解決をめざす（変化が期待できる目標を立て、具体的にいつ、どこで、誰が、どんな指導を行うのかを検討する）。
- ③ 困っている人を救う（子ども、担任、保護者である）。

アセスメントシートについては特別支援教育の理論と実践（金剛出版）を参考に本校にあったアセスメントシートを作成しました。

ケース会議には、管理職、養護教諭、特別支援学級担任、学年主任および同学年の担任、交流学級担任、コーディネーターが参加することが多いです。多角的に多方面から子どもの情報を出し合い、具体的な支援方法を提案していきます。指導の実際には、担任と相談し、本人の了解を得て支援を行うことができました。また、そのような具体的な支援を講じて子どもが変化したことを保護者に話すことで、良好な関係を築くことができ、教育相談につながることができました。好事例を少しずつ増やすことで、校内での特別支援教育コーディネーターの役割はより明確となり、児童理解や学校と保護者の信頼関係を深めることができていると思われます。

ただ一方で不登校や生徒指導の問題に関することは、早急な解決を図ることは難しいです。色々な視点からアプローチする教育相談コーディネーターとしての役割がかなり重要だと思います。そのためには学校の校内支援体制作りが必要である。様々な課題のある子どもたちの理解を自分自身が深めていく必要があります。その子どもの問題行動の原因を探ったり、見守ったり、他の教員と情報を共有したりすることを心がけたいです。また、研修を企画し、若年の教員の児童理解へのスキルアップを図っていきたいです。

（担当：小川 正人）



★一支部活動報告【新潟県支部】

◇総会・春季研究会（6月第1土曜日 or 第2土曜日）
新型コロナ以前は、新潟市で開催していました。総会を1時間くらい行い、研究会は基本的には教育系以外の講師にお願いし、普段聴く機会の少ない「フランス料理」ともいえる上質な「講演」を堪能することを目指してきました。令和5年度は「第35回全国大会（新潟大会）」の予行も兼ねて、オンラインと対面のハイブリッドで開催しました。この日の午前に県支部の各委員会を開催し、その年度の活動方針を確認します。

◇夏季研修会（8月第3土曜日 or 第4土曜日）
長岡市で開催され、実施形態は毎年異なります。午前中は4部会での事例研究会のことが多く、午後は教育・心理系を講師とする「講演会」、または4分科会程度の「講座」を開催してきました。この研修会は「旬」で「身近」な課題を扱いますので、日本食のフルコースを味わう「会席料理」といったところでしょうか。新型コロナ以前は、開催リーフレットを県内の各学校に配布するなどして、学会員以外の方にも案内をしてきました。

◇秋季研修会（8月～12月）
新潟県の面積は日本で5番目に広く、しかも離島の佐渡島があり、南北に242.8キロという地理的特徴もあって、会員の移動が大変です。そこで令和4年度までは県内を3つのエリア（上越、中越、下越）に分け、各エリアの研修委員を中心に企画運営をしていただく「エリア研修会」を実施してきました。県内どの地域からでも参加は可能です。令和5年度からは「秋季研修会」と名称を変えましたが、地域密着は変わりません。令和5年度は「相談の基礎」「カウンセリング手法を授業に取り入れる試み」「子どもに寄り添う教育相談—特別支援教育の視点から」「実践につながるロールプレイ」「教育相談とコミュニケーション」「ロールプレイで学ぶ聴き方」「アセスメントとその支援方法」の全7回実施しました。

学会員以外の方も多く参加し、新規入会者勧誘にもつながっています。講師は県支部会員の場が多いです。参加者がお互いに温かい交流ができる、い

わば「定食」のような活動となっています。

◇学校カウンセラー研究会(1月第2土曜日 or 第3土曜日)

この時期は大雪による移動手段の心配が常にあります。交通アクセスを考慮して、長岡市で開催しています。例年、4事例程度を扱い、専門的で熱い研究協議が行われます。

◇支部だより「支部だより越佐」の発行(年2回)

◇研究誌「スクールカウンセリ
ング越佐」の発行(年1回)

◇理事会(年3回)



(文責:新潟県支部理事長 渡辺 進)

★スクールカウンセラー情報

「多様な経験をスクールカウンセリングに活かす」

奈良県支部 江南 佳代子

長きに渡る小学校教員を早期退職し、臨床心理士資格を取得後、スクールカウンセラー(以下、SCと記す)の道を歩み始めて、14年が過ぎようとしています。



県立高校2校、私立中高一貫校でのSCとしての毎週の勤務は、ケース数も多く、多忙を極めるものでした。不登校を呈す生徒は勿論のこと、精神科症状で苦悩する生徒への支援、とりわけ高校においては、進級の困難さを抱え続けて悩み抜かねばならない日々を、生徒及び保護者と共に伴走するという状況でした。生徒自らが進路変更を視野に入れていけるようになるまで、あるいは通常の高校生活を送れるようになるまでには、多大なエネルギーが必要となってきます。そのことを保護者や教員が共有し、「生徒を信じて、待つ」という作業を共に行っていくために、SCとして何ができるかを、常に模索し続けていたように思います。

生徒とのカウンセリングのみならず、必死で心を寄せられるその保護者とのカウンセリング、そして

生徒や保護者への対応に苦慮される教員へのコンサルテーション。それぞれの立場の者が、各々で苦悩し、膠着化していく状況をいかに解きほぐしていくかという力量が、SCに求められるように思います。ケースの全体像を把握できるという利点はありますが、心理職として守秘義務を順守しながら、“集団守秘義務”の理解をもとにして、いかにケースマネジメントをしていくかが、自分に課せられた任務でした。

特に、教員へのコンサルテーションの際に、「教職経験をもたれたSCなので、教員としての辛さを共有してもらえるのが有り難いです」という言葉を聞かされたときに、自分の教員としての経験が心理職に活かされていることを実感します。

昨今、抑うつ症状や統合失調症などの精神疾患が疑われる生徒、及び発達に特性が窺われる生徒の相談、また精神障害を抱える保護者の相談が増加してきています。SCとして求められることは、様々な観点からの“見立て”をもって、先生方と検討を重ね、担任・学年主任・教科担当・養護教諭・クラブ担当、そして管理職の先生方と連携し、『チーム学校』として柔軟にサポート機能を発揮していけるように、マネジメントしていくことが大切であると考えます。特に医学的な観点の助言については、先生方からのニーズが高く、現時点での症状においては、どのような対応が必要かと共に考え、適切な配慮事項を考慮していく方向で進んでいます。時を同じくして7年間勤務していた、精神科クリニックでの経験も、今SCとしての仕事に役立っているように感じます。

毎年実施される職員研修では、刻々と移り変わっていく学校現場の状況をつぶさに捉え、〈治す(対応的)〉『リアクティブ型カウンセリング』を大切にしながらも、〈育てる(成長促進的・予防的)〉『プロアクティブ型カウンセリング』も重要視していく方向で、先生方に伝え続けています。SOSを出し始める生徒へのケアはとても重要ですが、全ての生徒を対象にした“個性の発見や自己理解・他者理解能力、人間関係調整力、問題解決能力などの伸長”に力点を置いた、いわゆる先を見越した成長促進的・予防的カウンセリングの必要性も、校内に広めていきたいと考えています。直近の職員研修では、集団活動を通して計画的に取り組まれた「人間力育成プログラム」の実践が先生方から報告され、それによって気になる行動が減少傾向にあることを、皆で共

有する機会をもつことができました。

振り返ってみると、相談室に通い続けた生徒が、自らの通室経験を活かして、心理臨床の道を目指したいと、大学の心理学科に進学していくケースが多くあります。私自身の歩んできた道も顧みながら、「人生でのいろんな経験は、きっと何らかの形で活かされていく」と生徒達にも伝え続けながら、今後も日々のSC業務に力を注いでいきたいと思っています。

(担当：鈴木 由美子)

★研修委員会

1. 第25回夏季ワークショップについて

本稿執筆時は、第34回中央研修会が終わったばかりですが、研修委員会としては、既に夏季ワークショップの準備を進めております。テーマと講師もほぼ確定していますので、お知らせいたします。

【日時】8月10日(土)

9:30~12:30 A、B、Cコース

13:30~16:30 D、E、Fコース

【開催方法】オンライン

＜Aコース＞ カリキュラム改善で子どものウェルビーイングを高める—自分と相手を大切にできる子どもを育てるために—

講師：西岡加名恵氏(京都大学教授)

＜Bコース＞ 青年期の発達障害支援

講師：村山光子氏(明星大学客員教授)

＜Cコース＞ ICT活用で変わる不登校支援

講師：森崎晃氏(東京学芸大学客員准教授)

＜Dコース＞ 教育相談の現象学的アプローチ

講師：土屋弥生氏(日本大学教授)

＜Eコース＞ 教育相談に活かすフォーカシング

講師：酒井久実代氏(和洋女子大学教授)

＜Fコース＞ 論文作成講座

2. 第35回中央研修会について

第35回中央研修会については、以下の通りとすることが決定いたしました。

【日時】令和7(2025)年1月26日(日)

【開催方法】オンライン

(文責：研修委員長 会沢 信彦)

★認定委員会

○第2回「学校カウンセラー事例研究会・情報交換会」について

令和5年11月26日(日)10:00~12:00オンラインにて、令和3年度及び4年度に学校カウンセラー資格を新規取得された方を対象に「学校カウンセラー事例研究会・情報交換会」を開催しました。北海道から沖縄県まで全国各地から11名が参加され、参加者が提供して下さった事例について2班に分かれインシデントプロセス法による事例検討を行いました。その後、それぞれの学校教育相談実践の状況などについて情報交換をしました。

参加者からは、「事例を通し『チーム学校』について、現在の自分の立ち位置や役割を見つめ直す貴重な機会になった。」「ケース会議の継続実施やコーディネーター役の必要性が大変印象に残った。」「自分の考えや方向性が合っているかヒヤヒヤしながら発言していたが、着眼点やアセスメント、経験など多面的・多角的な意見が聞けて実践的な研修だった。」「オンラインは地方在住でも参加しやすい」等々の感想や「もう少し時間がほしい」「3年目以降もこのような機会がほしい」などのご要望もいただきました。今後の運営の参考にしたいと思います。

○認定審査状況について

今年度の学校カウンセラー資格認定申請者は23名、学校カウンセラースーパーバイザー資格認定申請者は7名でした。1月20日(土)・21日(日)に東京会場にて面接審査を実施しました。また、今年度は地方での面接審査を復活させ、1月6日(土)には沖縄会場においても実施しました。

次年度以降も各支部または近隣支部で10名程度申請者がいる場合は、認定委員がその地方に出向き面接審査を行いますので、申請者を募っていただくと有り難いです。

また、書類審査のみとなる学校カウンセラー資格更新申請者は59名でした。

(文責：認定委員長 築瀬 のり子)



★学会誌作成委員会



現在、学会誌第34号の編集を進めています。

本年度の投稿論文は6本でした。第34号は令和6年6月発行予定です。多くの論文が掲載されることを願っております。

投稿された論文は、複数の委員の査読を経て審査結果をお返しします。その際、修正意見もお知らせします。修正後の再投稿、あるいは再々投稿により掲載に至る論文がほとんどです。委員による再審査、再々審査を経て論文がブラッシュアップされていくことを期待しています。

また、昨年度から開始しました「論文作成連続講座」は3名の方が受講されました。講師は3名ですので、充実した研修ができました。作成された論文の投稿をお待ちしています。来年度以降もこの講座を継続します。定員は9名ですが、多くの方のご参加をお願いいたします。

さて、すでにお知らせしていますように、学会誌第33号以降に掲載される論文のうち執筆者の了解が得られたものについては、学会ホームページ及びJ-stageで公開する予定です。学会誌第32号以前に掲載された、事例を取り扱っていない論文については、執筆者の希望があれば公開可能です。ご希望の方は、学会誌作成委員長までメールでお知らせください。メールアドレスは以下の通りです。

ytknkmr7@rs.tus.ac.jp

(文責：学会誌作成委員長 中村 豊)

★広報委員会

この会報は、会長の方針や会員のニーズに応じ、少しずつではありますが改進黨・改善を図っています。

その1つとして、今後不定期になりますが、「会員の著書紹介」を始めます。本部役員や委員、支部役員や一般会員も含めて、自薦・他薦は問わず推薦にもとづいて、担当委員・役員が可否を確認して掲載します。基準は、会員の実践や研究の役立つ学校教育相談やそれに関連する書籍ということになります。紹介する記事は、推薦者に書いていただきます。会報で紹介したい会員の著書がある場合は、新刊・既刊、単著・共著、単行本・専門誌を問わず、書名・出版社・著者等のお名前

と、推薦者のお名前及びメールアドレスを広報委員長の本松(m.fam@d8.dion.ne.jp)までお知らせください。掲載を決定し、文字数や締め切り日をお伝えしたうえで、紹介記事を執筆していただきます。

さらに、定番のコーナーとして「新入会員の紹介」もスタートさせます。これは、会員数が多い支部、入会者が増えている支部から割り当てていきます。支部役員から入会の経緯などを含む紹介記事と新入会員からのメッセージを掲載します。概ね入会2年目までの方を対象とします。本学会として、ほかの支部にとっても、会員を増やすヒントになることを意図していますので、割り当たった支部は、その趣旨も踏まえてご協力をお願いします。

(文責：広報委員長 本松 直美)

★ガイダンスカウンセラー関連情報

2023年度 第4回理事会議事録

- 1 日時 2023年12月15日(金)
18:00~20:00
- 2 場所 ZoomによるWEB会議
- 3 主な議事の経過及び結果

【審議事項】

第1号議案 ガイダンスカウンセラー資格認定試験・認定の件

会沢信彦認定委員長より、2022年度ガイダンスカウンセラー資格試験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについて、試験Ⅰ審査は申請者0名、試験Ⅱ審査は申請者39名推薦中39名の合格、試験Ⅲは申請者25名中25名の合格についての報告があり、承認された。

第2号議案 シニア会員の承認の件

シニア会員に関して、更新申請者4名、移行者申請者(12、11の会員)9名が報告された。

第3号議案 「修士相当研修プログラム」運営委員会の設置と内規案の承認の件

新井理事長より、資料に基づき「修士相当研修プログラム」運営委員会の設置と内規案が提案され、承認された。

第5号議案 「現職の教員に対する心理の専門性の
研修プログラム」検討チーム報告
石隈利紀理事より、経過報告と調査協力依頼なら
びに、調査の担当者に関する報告がなされた。

第8号議案 研修委員会報告
資料に基づき今年度の研修会の実績、次年度の活
動方針等の報告がなされた。

第9号議案 支援事業委員会報告
加勇田修士支援事業委員長より、今年度の「都立
高校生の社会的・職業的自立支援教育プログラム事
業」の実施報告と来年度の協力依頼がなされた。

その他、本年度の「公開シンポジウム」が6月27
日ではなく29日(土)であることが通知された。
(文責：一般社団法人日本スクールカウンセリング
推進協議会理事 学校カウンセラー・
ガイダンスカウンセラー 加勇田 修士)



★会員の著書紹介

『指導と評価』2024年4月号
特集「学級開きに向けて」

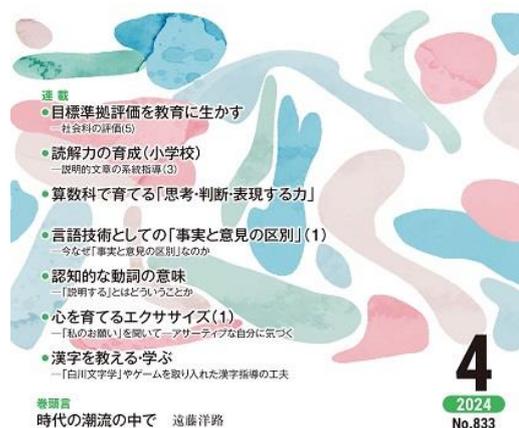
『指導と評価』は、図書文化社が刊行する、教育
評価と教育カウンセリングの専門月刊誌です。紹介
者は編集委員を務めています。2024年4月号の
特集「学級開きに向けて」では、多くの会員が執筆
されています。一読をお勧めいたします。

なお、本誌は書店で購入することができません。
バックナンバーも含めて、購入に関しては、図書文
化社ホームページをご覧ください。

2024年4月1日発行(毎月1日発行) 指導と評価 第70巻4月号 通巻833号 ISSN 0289-268X

指導と評価

特集
学級開きに向けて



『指導と評価』2024年4月号
特集「学級開きに向けて」

学級担任としてすべきこと	町田憲二
学年主任としてすべきこと	新井直志
生徒指導・教育相談担当としてす べきこと	○中川こずえ
学級経営の年間サイクルの中で、 校長として取り組んでいること	○松本直美
特別な支援が必要な子を迎える準 備	○石橋瑞穂
不登校の子どもがいるクラスを担 任する時にすべきこと	鈴木博喜
前年度、いじめがあったクラスを 担任する時にすべきこと	栗山泰幸
前年度、学級崩壊したクラスを担 任する時にすべきこと	○鈴木洋介
体調不良のため久しぶりに担任を 持つ時にすべきこと	○木村正男
ICTを使った学級経営へのチャレ ンジ	前多昌顕

○は会員
(埼玉県支部副理事長 会沢 信彦)

★会長コーナー

1月21日のオンライン中央研修会は、1日に発生した能登半島地震の復興の最中、183名の参加で盛会に開催することができました。午後のシンポジウムは、「いま、改めて不登校支援を考える」をテーマに、4名の方々（宮古紀宏先生、山本志織先生、中林浩子先生、鎌倉賢哉先生）より報告があり、チャットを通じた質問等への応答を軸にして、議論を深めることができました。

教育研究、教育行政、教育実践、フリースクールといった、異なる切り口から不登校を取り巻く状況と支援の在り方について報告、議論があり多くの示唆を受けることができました。特に、フリースクールの実践から、「学校、社会ではなく本人の側に立つ」「不登校の子どもとともに生きることを大切に」「不登校を否定的にみない」「聴く、つながる、つなげる」といった子ども観、指導観に関わる本質的な提起がなされ、シンポジストから教育実践や学校づくりに引き付けて応答がなされていたことに共感しました。

メタバースの活用による不登校支援から、対面の関係にどうつなげていくのか。「社会的自立へのリスク」をどうとらえ、支援をどう具体化していくのかなど、今後の課題も見えてきた研修会となりました。

なお、今年12月に出版予定の『学校教育相談—理論と実践のガイドブック—』（ほんの森出版）については、19名の執筆陣に受諾をいただき、予定通り進行していることもお伝えしておきます。

（文責：会長 春日井 敏之）



○令和6年8月にある全国大会（愛知大会）の二次案内ができました。今回は、久しぶりの対面方式で実施します。既に実践事例・研究発表の申込みが始まっています。締切が5月10日（金）までとなっています。ご希望の方は、愛知大会実行委員会事務局長あてにメールで申込むことになっていますので、よろしくお願いします。（申込書は学会 HP からダウンロードできます。）

（文責：事務局長 木村 正男）

★編集後記

今号では、能登半島地震に際して、会長のメッセージを臨時に掲載することになりました。一方、調査研究委員会は、このタイミングで特にお知らせする情報はないということで、掲載がありません。

また、今号では、広報委員会からのお知らせとリンクさせ、新コーナー「会員の著書紹介」をスタートさせました。これを前例に、会員が執筆した書籍を推薦いただき（自薦も可）、学校教育相談の実践・普及に役立ていただけるよう、紹介していけたらと思います。

今回も、「支部のキラリ」や「スクールカウンセラー情報」の実践紹介が秀逸です。会員の実践に活かされることを願います。

（文責：広報委員長 松本 直美）



★事務局より

第34回中央研修会も無事に終えることができました。多数の皆様参加ありがとうございました。

○メールリングリストによるメルマガの配信が始まっています。既に1000名以上の方に登録していただいています。メールアドレス登録をご希望の方は、各支部を通じて、本部事務局に連絡していただくことになっていますので、各支部にお問い合わせください。



一般社団法人日本学校教育相談学会 会報

第73号

令和6年3月20日発行

発行 一般社団法人 日本学校教育相談学会
会長 春日井 敏之

編集 一般社団法人 日本学校教育相談学会
広報委員会 委員長 松本 直美

事務局 〒179-0073

東京都練馬区田柄3-11-28

一般社団法人 日本学校教育相談学会事務局

電話/FAX 03-3926-7386

HP <http://www.jascg.info/>